

悲惨な戦場ホロ島、父の戦死と中国侵略

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像（4）

松岡 勲

はじめに

昨年末、大学時代の先輩の奥さんから電話をいただいた。先だって、先輩に送ったホロ島戦記（佐藤裕紀氏の「最悪の玉砕戦場／独立混成五十五旅団（菅）戦記」）の中に、先輩のお父さんの名前が載っていたというのです。お父さんの名前は「旅団工兵隊長、須藤進吾中尉」（進吾は「信吾」の誤り）とありました。奥さんは、読んでいて気がつき、驚かれたようでした。おかげで、次から次と霧が晴れるように事実が見えてきました。

悲惨な戦場ホロ島

須藤信吾さんの亡くなられたのはフィリピンのスールー諸島にあるホロ島でした。ホロ島の守備隊は独立混成第五十五旅団が中核で、その装備は劣悪でした。ホロ島に米軍が上陸したのは一九四五年四月九日で、日本軍はホロ市及び飛行場から敗走、ツマンタンガス山に後退し、さらに八月にはシロマン山へと敗走を続けます。この敗走を日本軍は「転進」と称しました。そして、九月一六日に日本軍は米軍に降伏しました。米軍上陸後の戦闘は、武器・弾薬、食糧、医療・衛生の絶対的不足により、悲惨極まるものでした。藤岡明義著『敗残の記／玉砕地ホロ島の記録』（中公

文庫）によると、ホロ島では約六千人の日本軍のうち生還者は八〇数名に過ぎなかったとあります。また、防衛庁防衛研修所戦史室著『戦史叢書 捷号陸軍作戦（2）／ルソン決戦』（朝雲新聞社）では、「生存者は一三五名にすぎず、すなわち、九六％は戦没していた。」とあります。これを日本軍は「玉砕」と美称しましたが、その敗走戦は「飢餓と炊飯と雨」に苦しめられました。兵隊を「消耗品」と見る日本軍の体質が多く将兵の無残な死をもたらしたと言えます。

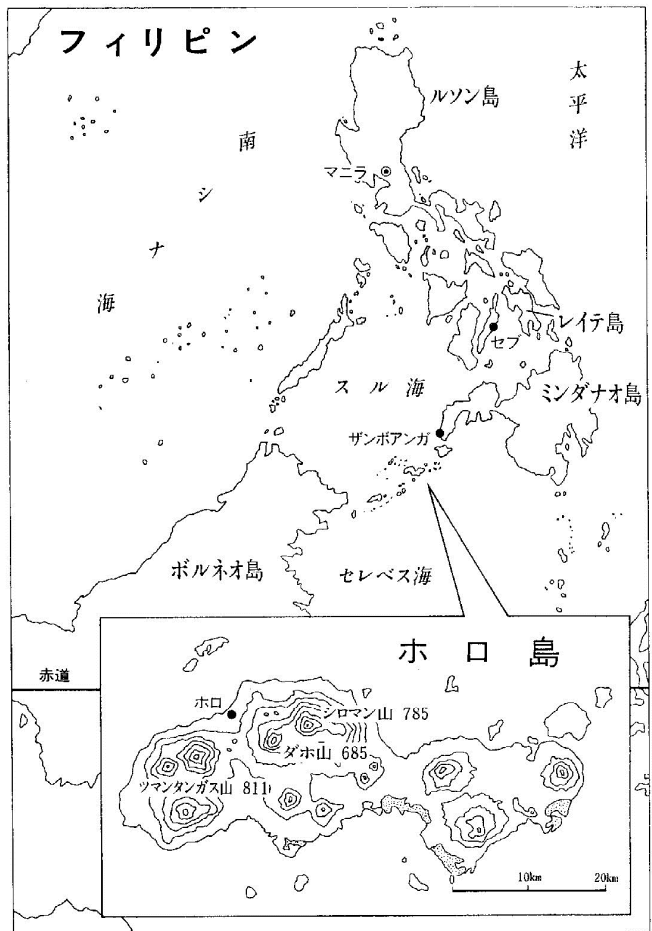
七月二六日に兵団部隊長会議で「転進」の決定がなされます。藤岡前掲書には、「大部隊では行動敏速を欠き、敵に発見され易い為、全兵力を二班に分け、各班コースを異にし、シロマン山の東南麓に落合う手筈が決まった。（中略）第一班は兵団司令部、川西部隊、工兵部隊等から成り、我が谷川部隊は神田部隊と共に第二部隊を編成し、（中略）シロマン山に至るといいうのである。」とあります。また、その時の惨状を次のように記録します。「残留者（負傷者、疾病者）は、我々の出発せぬ前から自決を始め、我々はさながら連続する彼らの自爆音によって、送り出される如き感すらあった。残留者は、全部で七、八〇名もあったであろう。」須藤信吾さんは工兵隊長であり、兵団司令部のある第一部隊にいたと思われます。その後、戦死されたと想像されます。先輩の

奥さんが靖国神社に須藤信吾さんの戦没の状況を問い合わせられて届いた「回答」には、「階級・陸軍大尉」「所属部隊・独立混成第五十五旅団通信隊」「工兵隊」の誤り（「死没年月日・昭和二十年八月十二日」「死没場所・比島スール群島ホロ島シロマン山」「合祀年月日・昭和三十三年十月十七日」となっています。二七歳でした。

奥村達造著『ホロ島戦記／独立混成第五十五旅団砲兵隊第二中隊員の手記』（私家本）には、ホロ島からミンダナオ島の米軍捕虜収容所に送られるときに見た幻影を

次のように書いています。「私はこのとき、遠ざかりゆくホロ島の浜辺に、戦友達の姿を見た。痩せさらばえて、ジャングルの中に死んで行った戦友達が、浜辺にひしめきあつて声を限りに呼んでいる姿を。『おうい、行つてしまふのかあ、俺達も連れていつて呉れえ』と。

それでは、多くの将兵をホロ島等の太平洋上の島々に置き去りにし、死線を彷徨わせる戦争がなぜ行われたのでしょうか。その原因は太平洋戦争末期の一九四四年七月二六日に作られた日本軍の「捷号作戦」にあります。（「捷」とは「勝つ」という意味で、なんとという皮肉な名称でしょうか。）奥村前掲書によると、『捷



ホロ島（フィリピン）『敗残の記』より

号作戦』とは、絶対国防圏の防衛線を、千島、本土、南西諸島（沖縄方面）、台湾、フィリピンを連ねる線に後退させ、『捷一号』から『四号』までの作戦計画から成り、『二号』が比島戦線に適用されるもので、「フィリ

ピンの地上決戦はルソン島」とされました。これによりルソン島以外の太平洋上の日本軍占領地域は防衛戦から除外されたのでした。ホロ島もそうでした。まさに太平洋上に散開する多数の将兵は放擲され、棄民とされたのでした。

ホロ島の戦闘でもうひとつ気になることがあります。藤岡前掲書のなかでイスラーム系のモロ民族の襲撃が頻繁に出てきますが、著者はモロ民族の特徴を「すべて熱心なる回教徒であるが、其の排他、背信、悍猛、精悍、残忍性」とし、随所の叙述にモロ民族への嫌悪感、憎悪感、襲撃の恐怖が現れています。しかし、よく考えてみると、日本軍の侵略で土地と食料、そして人命を奪

われた彼らの怒りと抵抗は当然のことであつたと思えます。

私の父は中国河北省で戦死していますが、このホロ島の日本軍生存者の現地人への視線は、中国戦線での日本軍の八路军や国民党軍への視線、もしかして父の視線でもあったのではないかと思います。

父の戦死と中国侵略

須藤信吾さんのホロ島での戦死を調べていて、私の父の中国での戦死についても調べ直しました。私の父・松岡徳一は、二度目の召集で、一九四五年一月二二日に中国湖北省鄂城梁子島西^{りやうし}南三〇〇メートルで戦死しました（死亡告知書）。現認報告書によれば、父は「第五野戦補充隊工兵隊」に所属し、戦死時には最前線におり、「顱頂部左顎部穿透性貫通銃創（脳損傷）」で即死でした。三五歳でした。防衛庁防衛研究所戦史室著『戦史叢書 昭和二十年の支那派遣軍（一）』によると、第五野戦補充隊工兵隊は「武昌県青山（武昌北東二〇キロメートル）地区の警備」を担当したとあります。

戦没地である湖北省鄂城梁子島について調べて見ました。「梁子島（湖）」は観光スポットとして出てきます。父の戦死した「湖北省鄂城梁子島（湖）」は「鄂州市」にあります。また、第五野戦補充隊工兵隊の置かれたのは「武昌」です。歴史上「武昌」と「鄂州」は幾度も地名が交換しているとインターネットに書かれていますし、「武昌」は現在では「武漢市」です。ですから、「鄂州」「武漢」（武昌）はほぼ同一地あるいは近接していると考えたいと思います。私はいずれ父の戦死した地に立ちたいと思っ

ていますが、その際には武漢市を訪ねることにします。

また、自宅に残っていた「弔辞」の部隊長名は「石桁和郎」で、前掲書『戦史叢書 昭和二十年の支那派遣軍（一）』には、「第五野戦補充隊工兵隊（長 石桁和郎少佐）」とあります。また、第五野戦補充隊は「昭和十九年三月大阪で編成して中支那へ派遣し、第十一軍隷下に入り、武漢地区の防衛に任じた。司令部は漢口に位置した。」

先の石桁和郎部隊長の「弔辞」によると、第五野戦補充隊工兵隊は「昭和一九年三月、（中略）高槻工兵隊にて編成」「門司、青島、南京を経て漢口に到着」「京漢作戦に参加」「再び反転して湘桂作戦に従軍」とあります。この京漢作戦、湘桂作戦は一九四四年四月から行われた日本軍による中国占領作戦で、「京漢作戦」「湘桂作戦」を含んで全体は「大陸打通作戦（一号作戦）」と言えます。それが終わるのは一九四四年一月です。その作戦終了直後に父は戦死しています（一九四五年一月）。また、一九四四年七月に「捷号作戦」が決定されます。須藤信吾さんは「捷号作戦」で棄民として放置せられて、ホロ島で戦死します（一九四五年八月）。どちらも工兵隊でした。

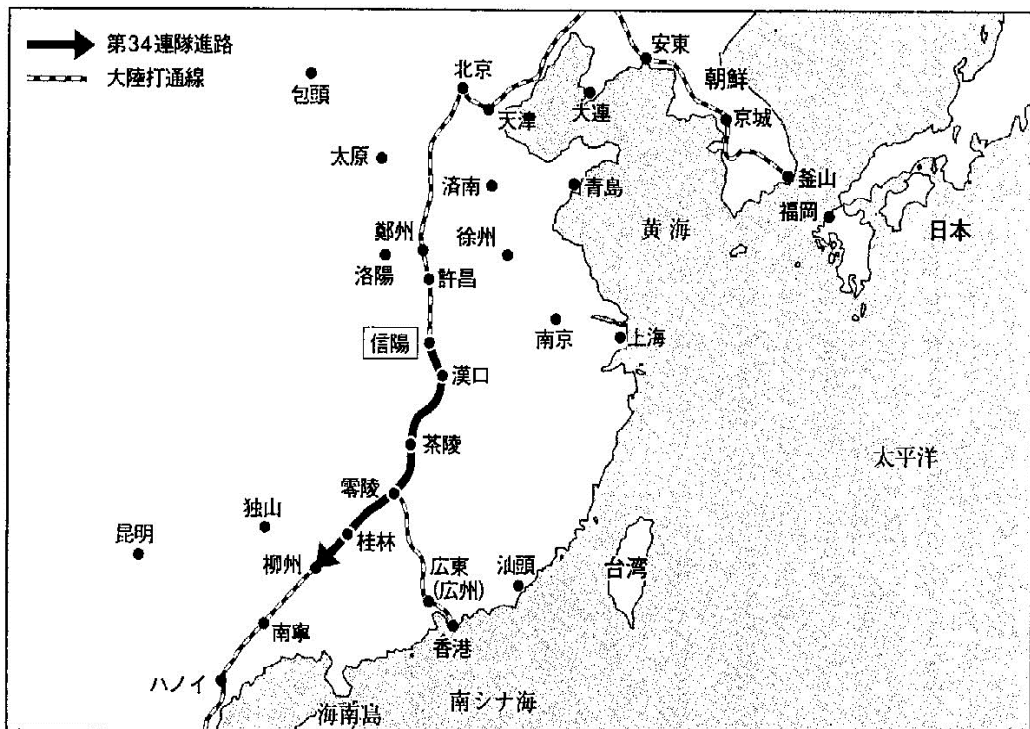
ウイキペディアには、「大陸打通作戦は、日中戦争中の一九四四年四



父、徳一（1944-1、二度目の出征時）

月一七日から一二月一〇日にかけて、日本陸軍により中国大陸で行われた作戦。正式名称（日本側作戦名）は一号作戦。その結果発生した戦闘についての中国側呼称は豫湘桂会戦。前半の京漢作戦（コ号作戦）と後半の湘桂作戦（ト号作戦）に大きく分けられる。日本側の投入総兵力五〇万人、作戦距離二四〇〇キロメートルに及ぶ大規模な攻勢作戦で、計画通りの地域の占領に成功して日本軍が勝利したものの戦略目的は十分には実現できなかった。」とあります。

NHK証言プロジェクト著『証言記録 兵士たちの戦争（1）』（NHK出版）の中に「中国大陸打通 苦しみの行軍一五〇〇キロ 静岡県・歩兵第三十四連隊」があります。この本は元兵士たちの証言をもとに、大陸打通作戦の実態を描いています。これによると、大陸打通作戦は、第二次世界大戦で米軍の前に敗北を重ねていた日本が、南方との陸上交通路を確保すべく広大な中国大陸縦断を目指した陸軍史上最大の作戦です。それは参謀本部内でも中止論が出るほど無謀なものでした。静岡県出身者で編成された陸軍歩兵第三十四連隊は、その先陣部隊として参加し、兵士たちはコレラや赤痢に倒れ、弾薬が尽きるなか突撃していきました。兵士たちをまづ苦しめたのは水不足でした。渇きに耐えられなくなった兵士が口にし始めたのは、田んぼや道ばたの泥水でした。また、民家の土間に藁だけの野戦病院で、粗末な医療物資しかなく、受けた治療はあまりに惨めでした。行軍の苦しさのあまり、兵士たちの中には自ら命を絶つ者が現れはじめました。兵士たちは中国人の集落から食糧を略奪し、それに抵抗する中国人を殺戮していきます。大陸打通作戦の実態は悲惨で残酷なものでした。



大陸打通作戦関係図『兵士たちの戦争(1)』より

(なお、この番組はインターネット上で見ることができます。)

このような中国戦線での日本軍の侵略行為のなかに父の戦死を置いたとき、単に戦争の被害者としてではなく、中国侵略の加害者の側に父がいたことが見えてきました。

(追記)

父の一回目の召集は一九三七年八月で、陸軍工兵(輜重兵、兵站部自動車部隊)として入営し、九月に中国に上陸し、北京、太原、漢口、徐州へと派兵されました。父はまだ独身でした。一九四〇年七月に召集解除になりました。出征の際の家族写真が残っていますが、庶民の側の戦争責任を感じさせられます。

おわりに

私と私の先輩がそれぞれ中学校三年生時に靖国神社遺児参拝に行っていたことが分かり、それを契機にホロ島で亡くなられた先輩のお父さんと戦争、中国湖北省で亡くなった私の父と戦争について考えてみました。今後も戦争の被害・加害の関係を意識的にとらえ返していきたいと思っています。最後に前回紹介しました茨木市安威地区の戦死者共同墓地の墓碑を調べましたので、それを表にして報告します。

(二〇一三・六・一)



出征の際の家族写真(1937-8)